



野生の生きものと出会える園づくり 子どもたちの目がいきいき輝く

やました はつみ
山下 初美 さん
福岡市立南庄保育所 所長
1級こども環境管理士
福岡県



保育士を目指す学生さんにひと言
「子ども環境管理士を取得したことで、自然や環境への理解が深まり、認識が変わりました。環境についての気付きや学びを人々に伝えていくことが自然を守ることに繋がっていきます。子どもたちとともに、生きものとの出会いや自然体験ができる保育士の役割は大きいと思います」



セミが落ちてた！園庭ビオトープはまるで宝の山です。

何がいるかな？ビオトープはいつも子どもたちの関心の的。そして、このような体験の場をつくるのが、こども環境管理士です。

続いて福岡県から、市立の保育所にお勤めの山下さん。環境教育に熱心なご当地にあって、前任の園は全国学校・園庭ビオトープコンクールでドイツ大使館賞を受賞。保育士の役割の大きさを実感し、次の異動先でも新たに取り組みを始めています。

子どもの認識は先生次第 そして子どもで先生も変わる

まず、率直に伺います。身近な自然と触れ合うことで、子どもたちのように変化はありますか？「優しい気持ちが生えます。それと、観察する力も育ってきています」

はじめは、虫がいたというだけで騒いでいた子どもたちでした。知らない虫はみんな『ヘンな虫』、一方で、チョウがやって来れば『ほくのー！わたしの！』と奪い合い。しかし、見つけた生きものを調べ、どんな生きものなのか分かってくると、じっと観察するようにになりました。『くさいと嫌がっていた葉っぱも、それがその葉っぱのにおいよと教えてあげれば、認識は『甘いにおいの葉っぱ』に変わります。』私たちの答え方ひとつで、子どもたちの受け取り方は大きく変わってしまします」

とはいえ、当初は生きものが苦手な保育士も多く、『園庭で毛虫を見つけたので駆除しました』と報告されるよう

る野生の生きものたちがくらせる場所にするためです」

「伝えること」と「信頼関係」で 意識は変えていける

どこかで捕まえてきた生きものを放したのでは、いずこかへ去ってしまったり死んでしまうなど、残念なことになることも多くあります。だから山下さんたちは、野草が生え、生きものたちが訪れてくれるのを、優しい気持ちで待っているのです。

先日、保育・幼児教育での自然体験に熱心な福岡県から依頼され、県主催のセミナーで講演しました。対象は保育士や幼稚園教諭、学生など。0歳からの自然あそびを紹介し、参加者と意見交換しながら考えることができたそうです。

とはいえ、危ない、蚊に刺される、ばい菌が…など、子どもが自然と触れ合うことに対して、世間にはまだまだ異論は残っているとのこと。しかし山下さんは、知識を持って自然体験の素晴らしいさを伝えること、そして、保護者との信頼関係築くことによって、そのような意識を変えていけると信じています。『どんな生きものに来ても欲しいからお絵かきをする、バッタやカマキリ、ヤスデまで、いろいろな生きものが描かれていましたよ』肝心なことは、当の子どもたちにはちゃんと伝わっているようです。

子どもたちが自然と触れ合うことのできる環境づくりを行うなかで、特にどのようなことを工夫していますか？「自然と、毎日触れ合うことができるように、園に生きものを呼び込む環境づくりを心掛けています」

「本物の自然と触れ合うことで、子どもたちの目はいきいきと輝きます。生きものは一つひとつ役割を持って生きているように、子どもたちも一人ひとりを互いに認め合い、思いやりを持って生きて欲しいと願っています」



田隅保育所ではここからスタート。地域在来の野草があれば、地域の生きものが無理なくすむことができます。それがビオトープの基本。



保育者を対象とした県主催のセミナーにて講演。乳幼児期の体験が、その子にとって一生の宝物となります。